

# 漁業経済学会 短 信

## 第32回 大会シンポジウム

『現代の漁協の性格と機能』（続）へのとりくみ

大会準備担当理事 増井好男

第31回大会シンポジウムは去る6月『現代漁協の性格と機能』をメインテーマとしておこなわれ、①沿岸漁家と地区漁協をめぐる現代の問題（近畿大学、倉田亨）、②沿海地区漁協の性格と漁家経営（東京水産大学、加瀬和俊）、③現代漁協の現状と問題点（北海道庁、池田均）の各氏から御報告をいただいた。

このシンポジウムに関しては、全国漁業協同組合学校 阿部誠、石川県漁連 長安靖史の両氏から次期シンポジウムへの示唆を含んだ感想

がよせられた（『学会短信』第44号、1984年8月参照）。第31回大会の成果を踏まえて第32回大会のテーマをどのように設定するかは大会をもちあげるために重大な課題であることはあらためていうまでもないことであろう。理事会において種々討議を重ねようやく第32回大会の基本的なフレームができあがったので経過報告をかねて準備の状況をお知らせしたい。

① 7月20日(金)18時から東京水産大学において常任理事会を開催。第31回大会のシンポジウムに対する反省と次期（第32回）大会へのとりくみについて話し合った。今年度の反省としては、総論的な柱を十分に設定できなかったきらいがあり、議論をかみあわせることができずに終始したことが指摘され、また漁協をめぐる諸問題がまだ他にも山積しているにもかかわらずそれらを十分にフォローできなかった。たとえば、漁協運動の担い手論、漁協問題の理論的な整理、漁協再編成の問題と課題等々があげられ、議論されたが、方向性を検討したことにとどまり、一歩進んでの議論は次回へとひきつがれた。

② 10月5日(金)18時から東京水産大学において在京理事会を開催。前回にひきつづき第32回大会へのとりくみ方針について検討した。先に、共通テーマである『現代の漁協の性格と機能』を第32回大会以降も続けるか否かという、テーマの問題が話し合われた。種々の意見が出されたが、漁協以外の課題についても学会

### 目 次

第32回大会シンポジウム「現代の漁協の性格と機能」（続）へのとりくみ	
… 大会準備担当理事増井好男……	1
寄稿 国際水産経済・貿易学会に参加して	
……池松政人、草川恒紀……	2
寸評 誇大表示・予算のネーミング	
……三輪千年……	4
事務局報告	
在京理事会報告（59年10月5日）……	5
在京理事会報告（1月23日）……	5
学会誌の編集・発行状況について……	6
新入会員の紹介……	6
第32回大会の開催日時と場所……	6
新刊書紹介「江戸前の魚」渡辺英一著	7
漁家経済研究会第2回研究会の御案内	7
国際漁業研究会の口座開設のおしらせ	8

として検討しなければならない問題が残されているので同一テーマとしてとりあげるのはとりあえず2カ年で打ちきるのがベターであろうとの意見が多く、『漁協の性格と機能』をテーマとするシンポジウムは今年度限りで終了することが確認された。

この確認にもとづいて具体的な報告課題の設定を検討し、「漁協問題の理論的整理」「漁協の高度経済成長以降の変質問題」「漁協の漁獲物販売機能問題」「戦後漁協の展開過程」「漁協の信用事業問題」など多様な意見が出された。

ひきつづき、報告担当者を想定しながらテーマをどのようにしぼるかが議論されたが、やはりコーディネイターをおいたうえで在京理事会で話し合われたことを考慮してもらい、テーマと報告者を選定してもらう方向をとるべきではないか、また、コーディネイターとして秋山博一氏にお願いしたらどうか、ということになった。

③ 11月6日(木)17時から東京農業大学において、在京理事会の決定にもとづいて堀口、加瀬、増井の3名によりシンポジウムテーマの打合せをおこなった。

秋山博一氏にコーディネイターを御承諾いただいたので、在京理事会で検討されたことを整理し、秋山氏に正しく伝えるために、あらかじめここで想定されるテーマと報告者をリストア

ップして秋山博一氏に御相談することとした。

④ 11月12日(月)18時から渋谷において堀口、秋山、増井の3名によりシンポジウムテーマの打合せをおこなった。

ここで、種々検討した結果、つぎの方針で秋山博一氏がコーディネイトすることとなった。テーマおよび報告者はつぎのとおり予定されている。

戦後漁協の展開過程

秋山 博一

経営危機下における中小漁業の現状とその役割

広吉 勝治

漁場管理主体としての漁協の機能と限界

島 秀典

漁業政策における漁協の役割

赤井 雄次

なお、最終的には若干の変更も考えられるが、コーディネイターの秋山博一氏が第31回大会報告の内容(報告要旨、大会後期、テーブルなど)を検討しつつ、準備をさせていただいている段階である。

会員諸氏のシンポジウムにむけての御研究の推進をお願いし、実りあるシンポジウムにしていただきたい。

寄 稿

## 国際水産経済・貿易学会に参加して

池 松 政 人 (東海大学海洋学部)

草 川 恒 紀 (東海大学海洋学部)

国際水産経済・貿易学会(IIFET)の第2回コンファレンスは1984年8月20日から23日までニュージーランド、クライストチ

ャーチ市のカンタベリー大学において開催され、その後25日までポストコンファレンスの旅行が行われた。

第1回は、1982年9月に4日間、米国アンカレッジで行われたが、今回はニュージーランド農業、漁業省、ニュージーランド漁業委員会、オレゴン州立大学シーグラントカレッジプログラムオレゴン州立大学農業・資源経済学部、カンタベリー大学資源管理センターなどの多彩なスポンサーシップによって実施され、14カ国3国際機関から約200名が参加した。

今回のコンファレンスは、学会の水産物国際貿易の影響要因と漁業政策上の課題解明の基本的方針に即して、経済回復、水産経済、水産物貿易を主題としてつぎのようなセッションに分かれて開催された。

- ① 漁業の展望
- ② 特定地域の経済回復と水産物市場
- ③ 国際水産物貿易の連累
- ④ 漁業と水産物市場構造の変化
- ⑤ 漁業と水産物市場の発展
- ⑥ 水産物貿易と漁業経営
- ⑦ 市場モデル
- ⑧ 調査報告
- ⑨ 漁業データ
- ⑩ 多国間協定
- ⑪ 漁業経営—理論と実際

8月19日は、終日参加者の受付、登録と宿舍割当(ドミトリー)が行われ、翌20日から講演ならびに研究発表が開始された。

初日には、開催国ニュージーランド漁業省関係者の歓迎挨拶、開会挨拶がなされた後、ニュージーランド漁業の現状や南太平洋諸島の漁業問題、水産物国際貿易の推移などについてのスピーチが行われ、参加者の地域漁業態様に関する理解を助長した。

昼食時には、FAO担当官から世界漁業会議の成果、刊行の実態についてのスピーチがあり、とくに参加者から開発途上国の調査、援助の強化を望み意見が提起されるなど活気を呈した。

同日夕方には、同大学に近接したレストラン・エリザ庭園において、歓迎レセプションが催され、会場は遠来の多くの参加者で混み合い、熱気が充満する中で、一時の友情と学術交流の場を楽しんだ。

さらに、21日夜は、同大学構内のゲストホールにおいて会食を共にしながら、学会開催の趣旨や経緯が和やかな雰囲気の中で開陳され、参加者の感銘を深めた。

また、会期中にサケ市場のワークショップや学会実行委員会(日本代表山本忠教授)も開催されるなど行事も多岐にわたった。

研究課題は、4日間に亘って57課題が予定されたが、ほぼ全課題が全日早朝から夕方まで間断なく発表され、いずれの会場にも多くの参加者が詰めかけ、終始学究的雰囲気の中で質疑応答が展開した。

ここで、個別発表の内容を紹介する余裕はないが、総体的に、漁業、市場や貿易に関する各国の実証的課題発表が多く、国際的領域に亘る問題提起や研究課題の発表はまだ十分に熟しておらず、これからの段階であるという印象を受けた。

日本からの課題発表の参加者は、3名であったが、日本大学経済学部の山本忠教授は「FAOの主要漁業海域における世界的レベルからみた魚種別構成の最近の変化」に関する知見を発表し、東海大学海洋学部からは、池松が「日本におけるマグロ類流通機構の変化」、草川が「日本におけるイカの市場分析」についての見解を述べたが、いずれも世界における主要漁業国日本からの課題発表であったため質問が続出した。

また、会期中に鹿児島大学水産学部岩切成郎教授も参加された。

23～25日までのポストコンファレンスのバス見学旅行は、モテオカの水産加工工場とネルソンの漁港、水産会社を訪問し、25日午後クライスチャーチ到着後解散した。

前記の如く、今回のコンファレンスにおいては、各国とも政府関係者の参加が目立ったとはいえ、国内外の水産経済の学者、研究スタッフは少ないという観念を訂正せざるを得ない程、活況を呈し、開催当時国の熱意と努力がしのばれた。

そして、次の第3回のコンファレンスは1991年にデンマークにおいて開催することを約して無事閉幕した。

## 誇大表示・予算のネーミング

三輪 千年

誰れの言葉であったか忘れたが、「社会・経済が混迷してくると、実にくまいキャッチフレーズを、お上(役人)は考え出してくれるものだ……」という意味のことをいわれたことがあるように思う。

最近発表された昭和60年度予算の説明を業界紙等で見ていると、お役人が作ったキャッチフレーズがそのまま見出しとなっているほどである(各紙に同じ表現が使われていることから、水産庁発表そのままを使用しているのであろうが……)。そうしたキャッチフレーズを拾い読みしていただくだけでも、その年度の重要施策の方向と内容がちょっぴり分かったような気にさせてくれる。と同時に、ほんの少しだけ明るい希望まで抱かせてくれるから見事なものである。

昭和60年度水産予算の最大の目玉として位置づけられているものに“活力ある漁村の形成”がある。事業内容は別として、歴史的に位置づけられてきた沿岸漁村のあり方と現実をこれほど無視した上に(無視したからこそなのかもしれないが……)、将来の漁村に夢(まさしく夢かもしれない)を持たせるにふさわしい理想的な表現であるように思われる。

ここ2~3年の目玉商品(予算項目)を見ると、58年度が“漁業技術の再開発”で、この年度には自助努力が業界の流行語となった。

59年度は“水産物の消費拡大”ということで、消費者ニーズ、EPA等が事あるごとに聞かれた言葉・フレーズであった。これらの予算が華々しく登場した陰には、行政改革でゼロないしはマイナス・シーリングが声高に叫ばれている折柄、当然いずれかの予算が減らされたり整理の憂き目にあっているのである。

予算のうたい文句化(キャッチフレーズ化)は、一つに国民へのアピール効果を狙っていることは疑いの余地はない。それだけではなく、各省庁が予算を獲得するために、大蔵省とお役人同志、もしくは先生方(議員さん)への説得のための説明材料でもある。そのために、一度聞いただけでは何のこともやらピンとこない、マリン・ランチング(海洋牧場)構想、マリンボリス(海洋都市)、マリノベーション(マリン+イノベーション)etcといった言葉が、臆面もなく使われたりしている。

予算のキャッチフレーズ一つをとってみても、一方で親しみやすさを売り物にしているかと思えば、片一方では“予算ぶんどり合戦”を勝ち抜く緻密な計画がそこにはあり、そうしたお上の狡智を充分わきまえて、予算の項目を再度読み返してみると、新聞等では説明されていない政策の方向等が読めたりするように思えるが……、それは私だけのことであろうか……。



# 事務局報告

## 学会事務局

### ◎ 在京理事会報告（59年10月5日）

1. 次期大会（32回大会）のシンポジウムテーマ「現代の漁協の性格と機能」について、視点をどのように定めるのか、個別のテーマと報告者は、等々具体的な内容を討議した。この結果、秋山博一氏を中心にして、大会準備担当理事と相談して決めることになった。

#### 2. 大会の開催地

山本忠氏の尽力によって、日本大学経済学部会議室で開催することに決定、それともなう依頼状の提出など事務手続を鋭意進めることとなった。

#### 3. 日本学術会議法の一部改正にもなう学術研究団体としての登録

昭和58年の日本学術会議法の一部改正にもなう、学術会議会員の選出方法が変更されました。これによると、先ず学術研究団体として登録しなければならず、締切時間も迫っていたため、事務局が申請書類を整えて提出した。会員候補者、推せん人の選出方法については、理事、監事全員の意見を聞くこととした。（具体的にはアンケート調査によって）

#### 4. 会誌の編集・発行および短信の発行について

会誌の定期的な刊行について、東京大学出版会と連絡をとりつつ、定期的な入校の維持、入校から発行までの期間の短縮等について検討した。会誌の横組みについても討議したが結論が出なかった。

### ◎ 在京理事会報告（1月23日）

#### 1. シンポジウムの準備

秋山博一氏、学会準備担当理事より、準

備状況が報告され、報告者は、秋山氏・廣吉氏、島氏、赤井氏の4名とすることに決定した。この間の準備状況については、「シンポジウムへのとりくみ」参照のこと。

#### 2. 日本学術会議会員の会員候補者、推せん人の選出について

理事・監事全員に対するアンケートの結果を参考にしながら検討した。今回は「総会」に回る時間的余裕がないため、特例として、理事・監事の投票によることとし、次のような選出規定を設けた。

##### 選出規程

1. 選出方法は無記名投票による。
2. 投票関係の諸手続きは選挙管理委員会が担当する。選挙管理委員会は、在京理事会の依頼により、次の三名に決定した。  
二野瓶徳夫（委員長）・三輪千年  
加瀬和俊
3. 投票は理事・監事計35名が行う。被選挙人は全会員とする。
4. 投票は「会員候補者」1名、「推薦人」2名を所定の投票用紙に記入する。「会員候補者」と「推薦人」は投票に際しては、重複しても構わない。
5. 「会員候補者」は上位1名を、「推薦人」は上位2名を当選者とする。同順位の者がいる場合には、選挙管理委員会の責任で抽選を行い決定する。「推薦人」は、第1位の者を「水産学」に、第2位の者を「地域農学」に登録する。
6. 当選者が「会員候補者」または「推薦人」となることを承諾しない場合には、次点の者を順次繰り上げるものとする。
7. 「会員候補者」と「推薦人」に同一人が当選した場合には、その者は「会員候補者」とし、「推薦人」には次点者を繰

り上げる(学会議の規則により、同一人が両者を兼ねることは出来ない)。

- 8. 「会員候補者」は、「水産学」に登録し、「地域農学」には登録しない。
- 9. 投票は2月12日必着のこと。

◎ 学会誌の編集・発行状況について

(学会誌編集担当理事より)

学会誌は、現在29巻4号が編集作業をほぼ終了し、印刷作業に入ろうとしています。大会まで刊行できるよう鋭意作業を進めています。なお、構成は次のとおりです。

29巻4号

第31回大会シンポジウム特集号

- 論文 沿岸地区漁協の性格と漁家経営  
加瀬 和俊
- 現代漁協の現状と問題点  
池田 均
- 沿岸漁業における技術展開と漁場利用  
宮沢 晴彦
- 書評 二野瓶徳夫著「明治漁業開拓史」  
高山 隆三

第31回大会後記

鈴木 旭

学会誌の定期的な刊行を維持するため、また内容の充実をはかるために、会員各位の積極的な投稿をお願いします。

◎ 新入会員の紹介(敬称略、順不同)

- 石川 宏 鹿児島大学大学院
- 野間 卓志 鹿児島大学大学院
- 亀田 和彦 鹿児島大学研究生
- 伊佐 広巳 水産庁
- 菊池 章裕 オレゴン州立大学大学院
- 宮崎 隆昌 日本大学生産工学
- 高橋 清隆 海外漁業協力財団
- 首藤 豪 海外漁業協力財団

◎第32回大会の開催日時と場所

第32回大会は、山本忠氏(日本大学)のお世話により、次のような予定で作業を進めています。

日時: 6月1日(土)、2日(日)

場所: 日本大学経済学部本館2階  
大会議室

なお、詳細については、次号の短信にてお知らせします。

学会事務局に、次の文献が寄贈されました。御礼とともに報告します。

文 献 名 (著 者)	寄 贈 者	発 行 所
海と人間1984年	海の博物館	同 左
「海の博物館年報Ⅱ」(海の博物館)		
The Whalery Review(日本捕鯨協会)	日本捕鯨協会	同 左
昭和59年度日本大学賞受賞論文要旨	日本大学	同 左
水産資料四季報	水産資料館	同 左
日韓合同学術調査報告	日韓漁村社会	同 左
第1輯 和歌山東牟婁郡那智勝浦町勝浦	経済研究会	同 左
第2輯 慶尚北道平海邑原海里	(甲南女子大学	
(日韓漁村社会・経済研究会)	益田研究室)	
水と人の環境史(鳥越皓之、嘉田由紀子)	伊藤康宏	御茶の水書房
現代資本主義と市場(川村琢監修)	長谷川健二	ミネルヴァ書房
南西海区水産研究所研究報告第17号	南西海区水研	同 左
日本漁業通史(岡本信男)	水産社	同 左
伝統ある捕鯨を守ろう。一有識者の声	日本捕鯨協会	水産経済新聞社
学術論文集第14集	朝鮮奨学会	同 左

## 〈新刊紹介〉

### 「江戸前の魚」

渡辺栄一 著

最近、魚に関する一般向きの本が目につく。伊藤勝太郎“魚の目きき”（徳間書店）、篠崎晃雄“魚の雑学”（新人物往来社）、を始めとして大洋漁業広報室も魚の消費拡大を目指して“お魚おもしろ雑学事典”（講談社）を発行している。これらの本はノウハウ、魚に関する知識を提供するものにとどまっているが、渡辺氏の“江戸前の魚”はこれらの本と趣を異にしている。

“江戸前の”という題名から連想されるのは、シラウオ、ハゼ、コハダ、シバエビ、キス、アナゴなど、天ぷら、寿司種の魚であるが、本書はそのような魚に就ての知識を提供するという性格のものではなく、東京湾、房総の各種の漁業、漁法の変遷をたどりながら、人間と魚の共存関係のありかたを問いかけるものである。漁業の近代化、大量生産的漁法、遠隔地への出漁という発展が、資本、労働の浪費を導き、豊かな海を死の海にかえてゆき、人間と魚の共存関係をいかに寸断してしまってきたかを、その具体的事実、著者の長年の体験を踏まえて本書で語っている。そして、東京湾の魚と房総の漁業者

に対する著者の哀惜の念が、たんたんとした叙述を通じて読者につたえられるのである。“もし、人間が謙虚さを失ってしまえば、人間と魚の共存関係そのものが破れ、その結果として人間の生存そのものが危機に晒されることさえあるように感じられるのです。”と“まえがき”で述べている。

私たちは、現在、金の卵を生む鷺鳥を殺してしまう、あの寓話の世界に生きているのではないか。東京湾における魚の生存権を考えるべきではないだろうか。日本の沿岸の各地に就て、本書のような本が書かれることが強く望まれるのである。

著者に就ては、会員の多くの方も御存知のことと思われるが、60年代後半の大学紛争の時、大学で漁業経済学会の大会が開けず、著者の骨折りで千葉県勝浦の国民宿舎で開催でき、おかげで大会が持続できたことを、当時、事務局をあずかっていたものとして改めて思い出し、著者の益々のご活躍を祈る次第である。

〔草思社；1984年12月発行；1,200円〕  
（文責：高山隆三）

## 告知板

### 漁家経済研究会第2回研究集会の御案内

漁家経済研究会は、昭和59年3月に第1回の研究集会を開き、皆さまの御協力のもとに成果をあげることができました。

さて本年も第2回研究集会の時期が近づきましたが、理事会では来たる昭和60年3月8日

に第2回の研究集会を開催することといたしました。この日は漁村青壮年婦人実績発表大会（7日）の後でもありますので沢山の方がたが御参加されますよう御案内申し上げます。

日時：昭和60年3月8日（金曜）  
午前9時30分～午後4時  
場所：東京都千代田区内神田1-1-12  
コープビル・5階・会議室

日程

1. 事例報告及び状況報告（午前）  
1人10分の報告で4～5人
2. シンポジウム  
「小型漁船漁業経営の諸問題」  
—営漁計画を含む—  
1人20分の報告で4～5人
3. 研究会総会

本年のシンポジウムは、各地の沿岸小型漁船漁業の抱える問題を、養殖等の兼業を含めて取りあげて、個別の経営分析に終始せずに、前

浜の資源を地域全体としてどのように使っていくのが良いのか、といった地域営漁計画の考えも入れて議論したいと考えています。

報告者の募集：現在大会での報告者を募集しています。御希望の方は事務局（あるいは理事）まで御申し込み下さい。

連絡先：漁家経済研究会事務局  
東京都中央区勝どき5-5-1  
〒104  
東海区水産研究所 水産経済  
研究室内（担当：多屋）

参加申し込み：60年3月5日までにハガキで申し込み下さい。  
（文責：多屋勝雄）

## 国際漁業研究会の口座開設のお知らせ

前回国際漁業研究会の設立についてお知らせいたしました。入会申込みをされました方は、このたびつぎのように口座を開設いたしましたので、会費3,000円をお振りこみいただきますようお知らせいたします。

銀行名：三井銀行経堂支店  
店番号：173  
口座番号：5190868  
口座名：国際漁業研究会  
会費：3,000円

なお、入会御希望の方はつぎの書式により申し込みのうえ、会費はお振り込み下さい。

① 氏名 ② 所属 ③ 住所（郵便番号、電話番号、併記のこと）、④ 当面の研究テーマ、研究地域

申し込み用紙のあて先はつぎのとおり。

〒156 東京都世田谷区桜丘1の1の1  
東京農業大学農業経済学科  
国際漁業研究会事務局  
増井好男  
（文責：増井好男）

## 国際漁業研究会の演題募集

5月末日に国際漁業研究会主催のもとに、研究会を開催致します。現在、発表演題の募集を行っていますので、ご希望の方は、3月末日までに研究会事務局（東京農大 増井）までご一報下さい。  
（文責：増井好男）

学会短信№45.  
1985. 2.  
事務局  
〒108 東京都港区港南4-5-7  
東京水産大学内  
電話 03(471)1251